

第1学年 道徳学習指導案

第1学年2組 23名
指導者 山口 由布子

1, 主題名 友達を思いやる 2 - (2)・思いやり

2, 資料名 「くり」

3, 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

友達と協力し、一つのことをやり遂げていく中で、子どもは相手を思いやり、自分が相手から認められる喜びを体験できる。しかし、自分の好き嫌いや損得にとらわれ、相手の立場や気持ちを無視してしまうこともある。この資料を通し、児童に、身勝手な言葉や行動が相手を傷つけていることに気付かせ、思いやりをもって相手に接することや、仲良く生活することの素晴らしさに気付かせたい。

(2) 児童の実態について

入学してから半年ほど経ち、学校生活にもずいぶんと慣れてきた。日々の学習活動、休み時間での遊び、運動会などの行事を通して、多くの友達と関わるようになってきている。友達が困っていると優しく声をかけて手伝う子がいる一方では、休み時間にボールの取り合いからけんかになってしまう子もいる。相手に自分の気持ちをうまく伝えられないために、乱暴な言葉遣いをしてしまったり、たたいたりしてしまうようである。

このように、けんかにならないために、自己主張だけでなく、相手の言い分をよく聞いて相手の気持ちを理解し、仲良くすることの大切さを考えさせていきたい。

(3) 資料について

この資料は、話として完結してはいない。各場面の三匹の動きを客観的にとらえさせたい。「りすた」と「りすこ」は、一生懸命にくりを持ち帰った「りすきち」の働きや気持ちを思いやる心に欠けていたことに気付かせたい。そして、どうすればけんかにならずに仲良くすることができるのかを、自分たちの問題として考えさせたい。

4, 研究主題との関連

研究主題である「よりよい人間関係を築いていく力」を育成するためには、自分の気持ちを相手に伝え、お互いの気持ちを理解し、相手を思いやり、仲良くしようとする心をもたせることが必要である。

低学年の段階では、相手の立場に立って考えることが難しく、自己中心的になる場面が多くある。また、自分の伝えたいことを言葉にすることができずに、友達同士のトラブルになってしまうこともある。よって本時では、自分のことばかり考えず、友達を思いやり、仲良くしようとする心情を高めたいと考える。

(年間を通した手だて)

- ・帰りの会で、友達ががんばったことを紹介し合う。
- ・児童が言われて嬉しかった言葉をカードに書き、ふわふわの木に貼り教室に掲示する。
- ・友達のいいところみつけを行い、お互いのよさを認め合えるようにする。

(授業における手だて)

- ・事前にアンケートを取り、児童の実態を把握する。
- ・りすの話の内容に近い体験を事前にさせておくことで、自分だったらどうするかを考えさせる。
- ・りすの絵を示してわかりやすく話をしたり、お面をかぶらせて役割演技をさせたりすることで、児童の興味を引き出す。

5, 本時の学習

(1) 本時のねらい

自分のことばかり考えず、友達を思いやり、仲良くしようとする態度を育てる。

(2) 本時の展開

	学習活動（主な発問○と予想される反応・）	指導上の留意点（◇）・評価（☆）
導入	<p>1、どんぐりを分ける活動をした時の、自分たちの分け方について、発表する。</p> <p>○どんぐりを分ける活動をした時、どのように分けましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三人で分けた。 ・じゃんけんをして分けた。 	<p>◇実際にどんぐりを分ける活動をさせ、物語の内容を児童にとってより身近なものにさせる。</p>
展開	<p>2、「くり」という物語を聞いて、話し合う。</p> <p>○どうしてけんかになったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二匹で分けたから。 ・かごだけをもっていたから。 <p>◎けんかをしないためには、三匹は何といえよよかったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三びきでわけよう。 ・なかよくわけよう。 <p>3、ワークシートに「りすた」と「りすこ」と「りすきち」の言葉を書く。</p> <p>4、三人で役割を決めて発表する。</p> <p>5、これまでの自分の生活を振り返る。</p> <p>○今までに、友達や誰かに「ふわふわ言葉」を言われたことはありますか。</p>	<p>◇「くり」という物語では、登場人物それぞれが働いている様子を見せる。</p> <p>◇「りすた」と「りすこ」が、「りすきち」の気持ちを考えなかったことに気付かせる。自分たちの分け方と比べさせる。</p> <p>◇けんかにならないようにするためには相手の気持ちを考えることが大切であることに気付かせる。</p> <p>◇役割演技ができるように、登場人物の気持ちを吹き出しに書かせる。</p> <p>◇役割演技をする時には、登場人物のお面をかぶらせて実感をもたせる。</p> <p>☆相手の気持ちを思いやる言葉かけが、できたか。</p> <p style="text-align: right;">（ワークシート・発表）</p> <p>◇これまでに書いてきた、ふわふわの木を紹介し、人を嬉しい気持ちにさせる言葉をすすんで使う態度を育てる。</p>
終末	<p>6、教師の話聞く。</p>	<p>◇教師の経験で、友達とけんかをして後悔していることを話し、意識付けにする。</p>

6, 板書計画



りすこ



りすた



りすきち

- ・なかよくわけよう。
- ・三びきで わけよう。

けんかをしないためには、三びきは
なんといえ ば よかったのでしょう。

- ・かごだけを もっていたから。
- ・いじわるをした。

どうしてけんかになったのでしょうか。

くり

【研究協議会】

(1) 自評

- ・児童の実態としては、明るく優しい児童がいる反面、自己中心的な児童もいる。また、相手に自分の思いを伝えられないために、仲直りができない児童もいる。そのため、当初は「どのように仲直りをしたらよいのか。」という指導内容を検討した。しかし、道徳的心情を養うことの重要性を考慮したため、「仲良くするためにはどうすればよいか。」という指導内容を行うことにした。
- ・事前に、実際にどんぐりを分ける体験をさせてから、本時の授業で「くりを分ける」という内容の物語を、ペープサートで演じた。全員が共通の体験をした上で授業を進めることをねらいとした。

(2) 協議

- ＜視点1＞ どんぐりを分ける活動をしたことが、自分自身を見つめさせるのに有効であったか。
- ・ビデオでどんぐりを分ける活動を見ることができた。友達を思いやる言葉を言っている児童の様子を見られたことがよかった。
 - ・事前にどんぐりを分ける活動をしていたので、本時の授業では児童から様々な意見を聞くことができた。
 - ・本時の物語の内容に興味をもたせることは効果があったが、自分自身を見つめさせることには効果があまりみられなかった。
 - ・事前に自分たちでくりを分けた方法と、物語でくりを分けた方法とを比べる活動を取り入れたらよかった。

- ＜視点2＞ ワークシートに自分の考えを書いて話し合うことが、よりよく人と関わることを考えさせるのに有効であったか。
- ・ワークシートには、りすの気持ちがよく書けていた。しかし、それをもとにして話し合いをするということではできなかった。
 - ・すでに板書でりすの気持ちが書かれていたので、ワークシートに書く際にそのまま写してしまいう児童がいた。そのため、自分の意見が出づらくなっていた。
 - ・板書がよい参考となり、ワークシートにりすの気持ちを書くことができた児童がいた。

- ＜視点3＞ ふわふわ言葉について話をしたことが、よりよく人と関わることを目指す態度を育成するのに有効であったか。
- ・本時の物語で発表できたふわふわ言葉を、今後の生活に生かせるとよい。
 - ・児童がたくさんふわふわ言葉を発表していたので、日頃の活動が生かされていた。
 - ・相手をうれしい気持ちにさせるふわふわ言葉の良さを実感することができた。

(3) 講師講評

講師 東京家政学院大学 教授 長谷徹 先生

＜授業について＞

【手だて】

- ・教師が意図的に子供たちの作業を見守り、発表させるようにすることが必要である。
- ・児童が心の準備をすることができるように、あとで指名することを言っておくなどの配慮も必要である。
- ・説話として体験談を話すことで、ねらいとする道徳的価値が子供たちにとって身近なもの

となる。また、子供たちがよく聞くようになるので効果的である。

【児童の活動】

- ・ 3匹のりすの台詞を使い分けて書けていた。1年生にしてはよくできていた。
- ・ 「自分の考えを書く。」という行為の積み重ねができていた。
- ・ 「どんぐりを分ける。」という共通の体験を事前にしたことで、子どもたちが考えやすくなっていた。

【資料】

- ・ 低学年の資料は簡潔な話が多いので、資料を読ませるよりも、教師が演じて見せる方が子供の心の中に入っていく。今回、教師が資料を覚えて熟演したことにより、子供たちの関心を引き付けながら物語を展開することができていた。
- ・ 自分の生活を振り返る時、授業での展開における資料を引きずらないように流れを切り替えたことで、自分のことについて考えることができていた。

【学級活動と道德の違い】

- ・ 「どう分けたらいいでしょうか。」のように、手段を考えて、最終的に作業に結びつけるのが学級活動である。
- ・ 「なぜじゃんけんなのか。」「なぜみんなと分けるとよいのか。」など、根拠になる部分を考えたり、振り返りをして終わったりするのが道德の授業である。その例として、よい授業展開だった。友達を思いやる言葉が出るように、ある児童が発表したことについて、他の児童たちに教師が尋ねていくことが必要である。

< 講義 >

【導入】

- ① ねらいとする道德的価値への方向づけ
- ② 資料への導入
- ③ 授業への雰囲気づくり

【資料の読み取りの仕方】

- ① 共感的活用 : 展開に沿いながら、自分たちのことを考える。
- ② 範例的活用 : 生き方の典型として学んでいく。
- ③ 批判弁護の活用 : 登場人物の行為についてどう思うか考える。
- ④ 感動的活用 : 感想、感動、疑問から展開をしていく。

以上の4つの中から、子供たちの実態やねらいを考慮して選ぶ。

【道德的実践力】

- ① 指示
- ② 模倣
- ③ 習慣
- ④ 心情
- ⑤ 判断
- ⑥ 意欲・態度

上記の④以降は、目指すべき道德的実践力である。授業におけるねらいの語尾につける。

今回は、6段階目の「態度を育てる。」なので、ねらいとする道德的実践力のレベルが高くなっている。

【役割演技と動作化の違い】

- ・ 動作化は、場面を理解させるために、書かれている台詞を言うものである。
- ・ 役割演技は、登場人物の気持ちになって子供たちが考えて台詞を言うものである。
- ・ 1年生のこの時期の役割演技としては、今回の1人1台詞でよかった。高学年になると、台詞を考えることが楽しみになる。台詞をいくつも言ったり、子供同士だけでなく片方に先生が入って会話をしたり、観客を巻き込んだりすることもある。役割演技を楽しむためには、低学年の時から積み重ねが大事である。

【成果と課題】

(1) 成果

(生活)

- ・いいところみつけカードを書かせる機会を多く与えたことで、友達の様子をよく考えることができるようになった。また、友達のいいところを多くみつげられる児童が増えた。児童が友達にいいところを伝え合うことで、相互の信頼関係が深まり、日常生活の中で助け合ったり協力したりする姿が見られた。
- ・友達に優しくされたことを振り返らせたことで、友達が困っているときには、「どうしたの。」と声をかけ、助けたり励ましたりしようとする大切さに気付き、進んでそうした声かけをする姿が見られるようになってきている。
- ・言葉で自分の思いを伝えることの大切さを実感させたことで、日常の学校生活において多くの児童が、友達の話をよく聞くことや自分の考えや意見を話してわかり合うことに一生懸命に取り組む姿が見られるようになった。

(授業)

- ・自分たちにとって身近な題材をもとに、具体的な体験を共有させた上で役割演技をさせたことにより、自分や相手の気持ちを考えることができた。
- ・発問を絞り、わかりやすいものにしたことで、児童が積極的に意見を発表するようになった。
- ・教師の体験談を話すことで、授業における道徳的価値をより身近なものとして受け止めることができた。

(2) 課題

(生活)

- ・自分の考えや思いを伝えることができる児童は多くなったが、まだ自分の気持ちを表現することができない児童がクラスに数名ほどいる。
- ・思ったことをすぐ言ってしまい、友達の気持ちを傷つけてしまうことがあった。相手の気持ちを考えて言葉かけをすること、また、もし傷つけてしまった場合は「～してごめんね。」という気持ちを相手に伝えることが大切であるということを引き続き指導していく。

(授業)

- ・資料提示や表現活動の工夫を、毎回の授業で十分に準備していく必要がある。
- ・自分自身を見つめさせるために、児童の振り返りの時間を十分にとる。